

即興ダンスワークショップ「環境—人間の組織化」

岩下徹（舞踊家）

河本英夫（東洋大学文学部哲学科教授）

河本：今日は本当にありがとうございます。フロアから質問があれば後で出させていただくと、まずお聞きしたいのは、例えば非常に単純な言葉のほうに移してしまうと、身体の深さには限りがあるのかという。ここのポイント、つまり深さに限りがあるのかという問いに対して、例えば半年たって、もう一度先生にやっ



ていただくと、ああ、また違う感じがつかめたということをしばらくの間、繰り返すかたちになるんですよ。そうするときに深さというものに限りがあるかたちなのか。

岩下：難しいご質問ですね。

河本：難しいですよ。それから素直なかたちで教えていただきたいのは、このかたちでトレーニングをして自分の身体について再発見、再発見、発見、発見を繰り返していったときに、例えば時間的な問題なんですけど、どこかで何か自分の感覚はあまり変わらなくなってしまったとか、停止してしまったとか、例えば勉強でいうと、壁に当たってしまって、少しずつ知識は増えているんだけど、自分の経験が全然広がらなくなってしまったとか。こういう壁の当たり方の問題にすごく関心があって、あそこまでいかれる人、例えば30年なら30年、ずっと続けておられる中に何度ぐらいか壁があるはずなんです。これは院生たちに多いんですけど、彼はアーティストなんですけど、やっぱり壁というのは必ず来るんですよ。その壁をどういうふうにして突破して進んでいるかということについて感じておられることを、きれいな回答がある問題ではないし、きれいに答えられてしまうのだったら、文化功労賞とかああいうのを出さないといけないので（笑）、そういうふうに簡単にはいかないんだけど、にも関わらず本当は自分の力の上限の限界のところであろうとする人、例えば自分の持っている能力で7割とか6割のところだけでやっている人は実はスランプもないんですよ。そのもう一歩、自分の先にかたちになったときに必ずスランプみたいな、ここはなんか怠けているわけではない、全力でやっているはずなのに、にも関わらずあまり前に進んでいないのではないとか、停滞感があるなという、ここの場面の話で何か感じておられることをそのままお話しただければ。

岩下：さっき、今おっしゃっていただいたようなご質問などが書かれてあるプリントアウトをい

ただいたんですが、いきなり今まさにお尋ねになったことが目に飛び込んできて、ギクッとしたんです。正直に申しますと、現在ちょうどその壁に突き当たっていて、停滞感のまったただ中にいます。身体の深さに限界があるのか否かということですが、同じやり方をずっと繰り返していると、たぶん限界にぶち当たってしまうと思うんですが、いろいろな方法、いろいろなやり方を模索していけば、きっと身体の深さがどんどん深まっていくのではないかなと思いますね。計り知れないことになるんだろうなど。

私がまだ若いころに『エピステーメー』という思想系の月刊誌が出ていたんですよ。70年代後半だったと思います。装丁が杉浦康平氏かどなたか、そのころ斬新なデザインで話題を呼んだんです。内容的にもその時まで全くなかったものですね。今でも私が持っている『エピステーメー』は、身体の特集号なんですよ。

当時、まだ身体という言葉が一般的には使われていなくて、われわれは肉体という言葉を用いていたんですね。そんな時代で、身体という言葉も出てきてちょっとしたあたりだった。あまり身体という言葉が浸透していませんでした。肉体という言葉のほうを使っていた。その肉体という言葉にまだ力があつた時代だったんですね。『エピステーメー』に書かれてあつたのは、身体とは未完の宝庫である。未完、未完了、完了していない、閉じていないということですね。そのことがそのままスーッと自分の中に入ってきたんです。

ところがそれから30年以上たって、今お話しになったことです。身体が未完だとすれば、じゃあ、自分の身体はどうなったのか。困ったことに未完でなく完了してしまった、閉じてしまった、袋小路に入り込んでしまった。そんな感じになっています。その感覚を感じ始めたのは、実はもう10年ぐらい前なんですけど、まだそのころは少し外から風が入ってきたりとか、風穴が開いたりするようなことがありましたので、何とかしのげていたんですが、ここ2~3年、その風が殆ど吹いてこなくなって（笑）。正直いって今、かなりキツイ、つらい状態に陥っています。

それはなぜかと自問自答をしているわけですが、自分の踊りもワークショップも滞っているのは、自分の方法、同じやり方にずっと固執してきたからではないかと思ひ始めています。われとわが身、自分だけを頼りにしてきたことの、当然の報いなんではないかと。

そこからどうやったら脱出することができるのか、今私にとっては差し迫った問題です。自分だけが頼りでしたので、そこから遠ざからないと。自分を客観視すること、自分で自分がやっていることをどこかで距離を置いて見るようにしないと。あるいは他の人のやっていることを学んだりして。そうしないと、たぶん「私が私」という同語反復からは、どうも逃れることができないのではないかと思っています。そんな状態です。

河本：要するに頂上に近くなっていく人は、どこかでそういうところに1回ぶつかって、それからやり方の工夫をしたり、いろいろなやり方をやったり、例えば天児さんのところの集団は、

それぞれの人は別の生活を通常はして、集まってその作品にみんなで参加をして、それなりにチームで刺激し合っているいろいろなものがあるんだろうと思うんですが、やっぱりそれでも作品の水準はものすごく高いし、それから外から要求される、つまりあの集団に、山海塾に要求されるというのは、こういう水準のいい作品で同じような情感を感じ取ることができて、1回見て感動をして、やっぱり2年前に見たときと同じように別の作品でも感動ができて帰るといって、外からの要請も当然入ってしまう。

岩下：そのようなところからなかなか降りられなくなります。そこが山海塾の活動を継続していく上でかなりシンドイところだと思いますが、やはり天児さんには、そのことを自ら引き受けて、続けていこうというすごく強い意志を感じることができます。

河本：岩下先生の場合は、例えば文章を書くと、幾つも文章を書かれていて、基本的に、この人は書いていくと詩人になってしまうなどという、本性、詩人のようなかたちでしか文章が成立しないだろうという感じの文章が圧倒的なんですよ。9割以上は、あ、この人が普通に書くと、詩人になってしまうんだという、つまり詩のまねをして詩人であるのではなくて、言葉を吐いてしまうと詩になってしまうという。そういうふうに出てきてしまうときに、例えば言葉と自分との関係のほうからは、何かすき間とか、あるいはその間の環境を変えていくというようなやり方は可能性としては、今はほとんどないという。

岩下：そうですね。言葉と身体、自分の中ではあまり深くは考えていませんね。ちょっとずれるかもしれませんが、今までやった中で詩人とのコラボレーションというのはあります。数はそんなに多くはないんですが、2人だけで、詩の朗読とのセッションということはやったことがあります。必ずしもそれはうまくいったわけではなく、実際には相当きつい時間だったんですが、その時の感覚は、まるで言葉と身体の間を広がる未知の領域に、自分がポーンと投げ出されてしまったようなものでした。

河本：僕はだいたい回答しにくい問いしか出さないようなところがあるのですが、そのときに例えば身体そのものが本来持っている野性味とか野獣さとか、それから自分自身にとっても制御しにくさとか、このへんのそういう野性味というのがどのかたちでつかまえたらいいかとか、あるいは表現の中のどの部分に感じ取ればいいのかというのは、やっぱりいつも僕の中では、どうもまだはっきりしないというのか、山海塾のステージというのはものすごく美しいですし、スマートなんです。体もきれいなんです。あの舞台を見るときに、あれ、これ、野性味ってどこにいったんだろうというような感じをときどき受けるんですよ。この問いについては、どういうふうに考えていけばいいんでしょう。

岩下：野性味とおっしゃるのは、たぶん山海塾の設立当初、75年に結成していますから、79年ぐらいまでですかね。彼らは80年にフランスに渡っているんですが、それ以前、日本で活動をしていたころには、その野性味といわれるようなものがまだ残っていたのではないかなと

思います。時代もそういう時代だったと思うんですね。野性味というのは、おっしやるところの今の山海塾の美しさというものはまたちょっと違うもので、文字どおり猛々しいものだったと思います。舞踏の誕生はもっと前になりますが、舞踏の揺籃期ですね、舞踏が始まったころにもすごく暴力的なところ、あるいは反社会性、今ではあまり聞かれなくなった言葉かもしれませんが、そういうような部分もあったと思います。

それが、だんだん時代が今になってきて、そういった野性味というのが薄くなっていく。やがて消えてしまうのかも。そこで野性にとって変わるのが逆に洗練なり、様式美なりということなのかもしれませんね。でも、最新作「めぐり」ですが、今、人数が増えて。私は50代後半なんですけど、同世代の人が3人いるんですね、群舞の。あとがグッと若く10年以上若い方々が4人おられるわけです。その若い方々が若手と呼ばれているんです。辛うじてその中のお一人だけが20代なんですけど、あとは30代、一番上の方は40代になったんですけど、その方々が、ものすごく激しく震える動きを振り付けられたんですね。その震える激しい動きなんですけど、それは本当にしばらく見たことがない動きだったんです。そんな動きって70年代、あるいはそれ以前の時代ではちゃんとあったなと思わしてね。しばらく見なかった。封印ということでもないんでしょうが、置き忘れられていて、忘れ去られていて、それが再び浮上してきたように感じられたのが、すごく新鮮でしたね。昔の荒々しさみたいなものが復権したような、復刻版ではないですけど、すごくそんな気持ちになりました。

河本：何度も書いておられるんですけど、内部へと一回、自分の深さのほうにずーっと下りていくと、そうすると外につながっていく回路というのは深さが深くなるにつれて、別のかたち、つまりこの局面の深さだったら、こういう外とのつながり、この局面だったらこういう外とのつながりみたいな、外とのつながりのモードもやっぱり変わってくるような感じがあるんですけど、そこはどのような感じで捉えておられますか。

岩下：初めてワークショップに参加される方にはいつも「自己と向きあう」、「他者と関わる」という文章をお読みいただいているんですね。この文章はずいぶん前に書いたものなんですけど、最近までそれらを全く違うものとして自分の中で捉えていたんですね。自己と向きあう、その一方で他者と関わる。全然違うことだと思っていたんですけど、これがだんだん最近になるにつれて近づいてきているんです。二つで一つのようなことなのではないかなと思いはじめてきました。二つで一つ、車輪の両輪のような。

河本：ものすごく重要な場面なんですけど、その感じをぱっと一番感じられるのはどういう局面ですか。あっ、これは同じものかというのか、二つで一つだなという感じ。

岩下：自分が踊っているときなんです。自我の壁、自他との境界というか、踊っていると、そのようなものが少しずつ薄くなっていったりぼやけていったり、そんな感覚になる。それで自己と向きあう、他者と関わるというのはそんなに遠くないんだろうと。ひょっとすると、こ

それは同じことなのではないかなと。この異なるふたつのことがひとつであるというような事態を、一言で語る言葉を今はもっていないんですが。

河本：ここにはみんな哲学科とかからきているんですが、自分自身を掘り下げて掘り下げて、自分自身の中へ中へという、この回路というのは普通に考えていけば、どうしても「私は私」というほうにいきやすい。その訓練を積んで私は私だというところまで手にして、そこから外につながっていくということでは、さっき話されたことはないんだろうと思うんですね。つまり、「私が私」とこういうふうにどんどんどんどんいっているときに、何か同時にどこかで開いていく回路が形成されて、それも進んでいくにつれて局面が変わりながら形成されていっているのではないかなという感じを受けているんです。

ただ、そのことを語るときに本当にさっき言われたことと同じで、そこを語るということは人間の言葉ではもう足りていないというのか、人間をやってはいけないなという感じがあって(笑)、人間ではどうもうまくそういうところ、人間の言葉もそもそもがそういうところを表現するようなかたちになりにくいという部分があるんだと思うんですが、そうするとこらへんの言葉というのは本当に言葉を編み出さなければ、うまく表現できないだけけれども、言葉が編み出したからといって、その言葉と事柄がうまくつながっているかどうかも分からない領域だから。でも言葉というのは自分でつくってみて、考えてみて、それを手掛かりにしてもう一回、自分自身を動かす、自分の身体を動かす、手掛かりとして設定して、そういうことをやるという、この働きは含まれていると思うんですが、そこがぴったりと事柄としてうまく釣り合うような言語というのは、何かよほど人間をやめない限り無理なのではないかという感じは受けるんですが。

岩下：語れないもの、ありますね。いかんとも言葉にし難い。今日のこの時間も言葉になる部分もあるけれども、言葉にできないことのほうがすごく多かったのではないのでしょうか。きっといろいろなことが起こってはいたんでしょうが、そのことに対して、いかに気付くのかということなんですが、気付き得ないものがとても多くあったように思いますね。気付いたものの記憶自体も消えていってしまったり。



河本：こちらからお聞きするのは、このへんでみなさんから質問をどうぞ。

参加者1：開いたときの感覚というのはおありですか？

岩下：自分を開いたとき？ はい。

参加者1：その開いたときの体の中の感覚を言葉にあてるというのはできるのでしょうか？

岩下：ちょっと話がずれるんですが、感覚が開かれたときに自分が発語するということはあります。その発語で、また自分の動きが変わってくるということはあるんですが。やはりご質問とはずれてしまいますよね。

参加者1：どんな発語をされるのでしょうか？

岩下：さっき（踊りの最中に部屋に人が）入ってこられたときに、「どうぞお入りください」みたいなことになるわけです。

参加者1：開き方に程度、度合いはあるのでしょうか？

岩下：度合いがあって、開き方の質も変わってくると思う。

参加者1：それは自分で制御をされている？

岩下：制御というか・・・、のぞかれたのを感じたので、スッと向こうに行きました。お二人、男性、女性、職員の方がおられました、あの方々には踊っている状態の中で、「どうぞお入りください」と言葉が出てきたんです。それがまた別のシチュエーションになったりすると、たぶんもう少し大きな声で皆さんに聞こえるように言ったかもしれないですが、そこがちょっと違ってましたね。大きく台詞みたいに言うときもあります。あときは感覚が向こう側だけに開いて、お二人のほうに開いたんですが、たぶん、そのときの感覚がもっとこっち、皆さんのいる方向にもグッと開いていれば、大きく発語したかもしれない。

参加者1：その指向性というのを自分でコントロールされる。

岩下：コントロール・・・、むしろ、そうなってしまっていたという。コントロールではないのかもしれないですね。野性ということともつながっていくようですが、野性というのはコントロールができないと思う。自身の踊り方や動きの問題に関しては、コントロールといたしますか、踊りながら同時に動いている自分を客観視、外側から見ているような感覚があるんですが、ときたまそれがポンとなくなる時があるんですね。そうなるとその時ほんの一瞬だけ野性がのぞくのかもしれない。でも、またそれはすぐに飼い慣らされてしまうのかもしれませんね。

参加者1：基本は全てやっちゃってしまっていたというかたちが望ましいのでしょうか。

岩下：そうなればいいですね。でも、やっちゃってしまっていたというかたちになるのもまた自分が見ている。その見ている自分がいなくなると、もっと違ってくるのかもしれない。見ている自分がひょっとすると今すごく邪魔なのかもしませんね。

参加者1：結構強い存在になってしまっている。

岩下：はい。強すぎるのかもしません。なにしろ即興ですから内発的なものを非常に大事にしています。内発的に出てきたものをもう一人の自分、自分の中の自分ですね、それが非常に冷静に観察しているわけです。その冷たい観察者がいなくなれば、内発的なものがもっと素

直にパーッと発露してくるような気がします。

中国の気功で自然気功というのがあるんですよ。そのセミナーを1回だけ受けたことがあるんですが、その感覚に近いようですね。決して無意識になるわけではないんですが、観察をしているようなまなざしではありませんね。ただ単に見ているだけ。何も観察したり、批評はしない。そのような態度ではない。だから全くコントロールをしない動きが押し出される。そういうこともあったほうがいいのかもしいかなと今思い始めてる。だから、いわゆる踊りの動きではなくて、こんなもつと変てこな動きが出てきたりするわけです。ひょっとするとそういった動き、抑え込まれていた、抑圧されていた動きを解放させていこうという考えが初期の舞踏にもあったのかもしれない。

参加者1：山海塾が野性時代のころには観察者はいなかった？

岩下：野性と観察者とがまだ共存していたのかもしれない、辛うじて。

河本：結局、例えば直接の知り合いではなかったんですが、やっぱり土方（巽）さんの、あの最初のつくり、つまり肉体が自ら自身に反乱をしてしまうというところの、その場面の切り取りで身体の変現というのはもうそれで成立している。というように、ある意味でいうと、非常に粗暴だし、そういうものについての快感みたいな部分は感じ取れていた時代というのがたぶんあっただろう。つまり見ていて、いつも思うんですが、あれだけ外から見ていて美しい動きだとすると、美しい動きが本人はつくり出せながら、かつそれが快感であり、喜びでなければおかしいんですよ。喜びの部分と、それから美しさ。ところが、一生懸命、ひたすら踊っている人で、あの人はずごく一生懸命なんだけれど、本人はあれ、相当大変だろうなど、本人は喜んでいないんだろうなみたいな、その部分、要するに快感であるとか、快感自体は時代的には相当大きな変化をしてしまうものですから、いろいろな局面でいろいろな快感のモードというのは出てくると思いますが、快感というよりは、むしろ本人の喜び、このように美しく踊ってしまっている本人が、自分自身は喜びなんだという、こここのところの感じがうまく重なってくれていないような場面が出てきたりするのかなという感じは、いろいろなものを見ていて、実に技巧的にはうまいのに、あら、あれは本人が喜んでやっているんだろうかとか。

岩下：ありますね。そういう舞台を拝見することはあります。

河本：だからその部分、内的な自分自身にとっての喜びであるということと、身体表現が洗練されていくということが必ずしもドンピシャで重なる、あるいはドンピシャで重なったらいけないのかもしれないんですが、そういう領域の問題は何かありそうだという感じは受けるんですよ。

正直に教えていただきたいんですが、舞踏をやっていて最も先生が感じられる喜びの場面は、例えばそれまでの自分では見えていなかったものが一挙に体が感じられるようになった

とか、つまり発見ですよ。発見の場面が近いのか、それともそれまでつながりが見えなかったものが突如、別のかたちで自分のものとつながることができるようになった。つまり新たなつながりがつくれるようになったような場面が近いのか、ああ、なんか自分が自分だなというふうに感じられるときに自己を正当化するような自分ではないわけですから、つまり自分はこんな自分なんだというような主張ではないわけですから、主張とは別の自分ですよ。どういうところの場面がそういうときには一番近い局面として出てくるのかなという。

岩下：必ずしも山海塾の舞台と私のソロ活動とがピッタリ一致するわけではないんですが、じゃあ、まず山海塾で。今、記憶を掘り起こしているところなんです、喜びを感じたのは、あのときですね、「とき」という作品があったんですね。パリ市立劇場というところで再演をしました。1週間ぐらい公演があったと思うんですが、「とき」は私自身今でも好きな作品のひとつですが、結構難しいんです、振付が。いつも必ずどこかを間違えていたりするんです。振りそのものを間違えたり、タイミングが早かったり、遅かったり、なかなか自分で自分自身の踊りに対して高い点数をあげられなかったんですよ。

それで、最終日だったんですが、かなり自分でよく踊れたと思ひまして、実際に間違えなかったんです。一つも間違わずにうまく踊れたんですね。それが終わってからシャワーを浴びて白塗りを落としているときに、ふと思ったことがあります、これでよかったんだということなんです。何がよかったかと申しますと、山海塾というのは、ものすごく精緻に作品をつくり上げて完成させていく方向で進んできたんですね。その前は今申しましたように、少しすき間が空いたりほつれていたりする部分とかがあったわけですが、それがなくなっていく方向に進んできて、「とき」にもそういうところがありました。

以前はそういった作品のすき間に自分を強引に割り込ませていく。そんなやり方をしていたんです。でも「とき」に関してはそのような余地がなかったんですね。それで振付・演出に自己主張も何も挟み込まないで踊ったわけなんです。その日、最終日にそれが終わったときに、これでよしと思ったんですね。自己表現、自己主張というものを差し挟まないでいいんだと思えたんです。もしそれで自分がこの中に消えていってしまっても、そのことを肯定できるように思いました。仮に個性というものがあるとすれば、そういった中でも表れていくのではないかと思ったんですね。むしろ無理に自分を押し出していこうとすると、そこだけが浮き上がってしまう、そんなことになってしまうのではないかなと。自分が作品に同化していく、解消していくようなことをそのときに初めて喜びとして感じ、自己主張とは違うところにあるんだなと思いました。

翻って自分のソロ活動、これは完全に自己表現であると最初は思っていたんです。でも、やっぱり最近はそうではない、おっしゃったようないわゆる自己表現、自己主張ではないと思ひ始めた。それでは、自己実現はどういうことなのかということ、変な話ですが、踊ってい

るうちに自分がなくなってしまう、実際なくなってしまうということはないんですが、たまにそんな感覚に近づくことがあります。そのとき、私を超えた非人称的な地平が広がってゆくような気がします。それを私は場と呼んでいるんですが、私が踊っているというよりも、場が踊っているような感覚が生まれ、そのことに無上の喜びを覚えるようになったんです。それは目には見えませんが、肌で感じることはできます。そうなることはごく稀ですが、そうなれば観るとか観られるとかもうどうでも良くなってしまいます。

河本：あと、幾つかぜひ、お話を聞いておきたいということがあれば。

参加者1：自閉症の人の踊りを見たとき、先ほどの喜びと自己表現が両立できている、ある粗暴さと美しさがちゃんと同居できていると思ったことがあります。

岩下：自閉症といってもいろいろあるんでしょうけど。ただ、自閉症の方といっても、全て完全に自閉している状態だけではないと思うんですね。どこかで外へ通じる回路が敷かれるときがあって、そのときにハッと思うときがありますね。ある方を今思い出しているんですが、それまでは全くその方の世界の中だけで踊られているわけですが、あるときフッと外とつながっていかれるときがあって、そういうときはハッと胸を打たれるようなことになります。踊りをどのようなものとして捉えるかということなんですが、それはその人の中で完結するものではなくて、外へと開かれていくもの。誰かと一緒に踊ることもそうだし、今日は環境、組織化ということがテーマなので、環境に開いていくこともそうだし、そんなことを感じたときいいなと思いますね。

河本：ほかにありますか、どなたか、ぜひ聞いておきたいという。

参加者2：今日やっていて、アメンバーになるという話があって、言葉ではなくて体からという前提で臨んだんですが、やっぱりどうしても言葉を抑えようとしても出てきてしまうというのがあるって困っていて、アメンバーという言葉が出てきて、アメンバーだったら、太陽が好きだよなど

思って、結果的に壁に張り付いていたんですが、そうやって言葉、最初は全部頭で動いていたんですね。光にいくだろうなと思って、やっていく中で、でも、壁に張り付いていても、背中のやつらも日光を浴びたいだろうなと、そんなふうになっていたんですが、そういうふうにやっていったら、言葉を最初に頭でっかちでも突き詰めていくと、意外なものが出てくるというパターンもあるのかなと思って、そういうやり方がいいのかなという。



岩下：先ほど河本先生がおっしゃったように、言葉は手掛かりとしては私も使っています。そこからどういうふうに感覚のほうへ進んでいけるのかなというのは考えますね。途中で別のものにぶち当たるかもしれないし、最初に始まったところ、出発点に何回も戻ってきたようにもなるし、同じようなところをグルグルまわることも。そこから別の道に入っていければと思います。またそこから戻ってきて、また違う道へ行って、そんなことが出来ればいいなど。

参加者 2：今日もう一個、自分のテーマで「恥ずかしがらない」というのがあったんですが、やっぱり人からのまなざしはどうしても気になってしまうんですね。今日はやっぱり自分で精いっぱい、あまり人を見るということができなかったです。むしろまなざしを気にするということかたちでしか他人と関わることがなかったんですが、その羞恥心はなんの得にもならないなと思って、そのへん、先生は羞恥心はないんですか。

岩下：そんなことはないです（笑）。一応人間をやっていますから羞恥心はあります。

参加者 2：踊っている最中はどうですか。

岩下：恥ずかしくないといえましょうになります。恥ずかしくないのではなくて、恥ずかしいからこそみたいな。恥ずかしさゆえにこの身を晒そうというような気持ちです。恥じらいがなくなると人間としての品格が。

参加者 2：いや、でも、自分でやりたいと思ってやることを羞恥心によって抑えるって意味がないなと思って。

岩下：そういった意味ではそう…

参加者 2：正しいと思えば恥ずかしくても絶対にやったほうがいい。でもまだちょっと邪魔しているところです。

岩下：羞恥心なり常識なり、さまざまに自分を抑え込む力、自己規制がありますよね。それらを打ち破っていくような強いものが、強い衝動が出てきたときに変わっていくのではないのでしょうか。

河本：ほかにありますか。

参加者 3：即興ダンスは今日が初めてなんですが、例えば一緒にやられている山海塾さんに新しく入ってきた人がやるといったときも、今日この場でやったような自分の肉体的なものとか身体的なものを例えば外に向かってとか解放するみたいな、それをイメージしてやるという練習なんですか。それとも型みたいなものがある。

岩下：山海塾と私の活動には異なるところと同じとか通じるところがあるんですね。異なるところは、私は即興で踊るだけですが、山海塾の場合、振付作品をつくって上演しています。それが大きな違いなんですが、身体に対する考え方ということではほぼ一致するんですね。それはどういうところに基礎を置いているかということ、身体をリラックスさせるということ

です。脱力とか弛緩とかそういうことがありますね、そういった状態を大事にして、その感覚をできるだけ保ちながら、かたや振付作品をつくる方向へいたり、かたや即興で踊る方向へいたりというようなことになります。山海塾でも若い方が来られたときには、基本的にはリラックスした身体を獲得するというところから始まって、その時期がすぎたら、おっしゃったように型といいますか、今までの作品のいろいろな動きを覚えていただくようなことをやっています。根っ子は同じようなところがありますが、枝葉が分かれていくところで違いが出てくるわけです。

参加者 4：即興ダンスで無音で踊られるというのはどういうことなんでしょうか？

岩下：以前、私も踊り始めたころは音楽を使っていた。それも既成の音楽を使って踊りをやっていたことがあるんですが、それはただ単に音楽を利用しているだけにすぎないのではないかなと思ったんですね。と同時に、それでは音楽に依存的になる、寄りかかってしまう。その分だけ踊りが弱くなるのではないかなと思って、音楽を取ってしまったわけです。たしかに無音ということですごく窮屈になったり、息苦しくなったりしてしまうところに陥ることもあるんですが、逆にいろいろな音が聞こえてくる、いろいろなものに気付いていけるような可能性も同時に開いてくれるのではないかなと思います。

参加者 4：環境に依存するというものでもないんですよね？ 依存とかたちにならないように自分のありようを持たせるような。

岩下：そうです。依存ではなくてちゃんとそこに存在して立っている、自立しているということが理想です。

参加者 4：それで環境の音とか光とかを中に取り込みつつ、それには依存はしない。

岩下：依存はしない。先ず対峙する、対するわけですが、そしてそれと共存する、和するわけです。

参加者 5：先生の場合、例えば他人と関わる中で自分の変数をつくっていくとか、あるいは環境ということだと思うんですが、あれは別に何かを落とすとか、マイナスにしてみるとか、あるいは何か負荷を与えてみるとか、そういった条件を与えたことはあったりしますか？ 踊るときにご自身に負荷をかけて、何か障害を別様に乗り越えていくみたいな。

岩下：手を使わないとかいうのはよくありますが、他にも何らかの限定や制約を設けてやることはあります。あと、立ち位置を変えないとか、そういった物理的な制約です。そうするとそれまでやっていた無制約、無限定でやっていた動きとちょっと変わってくるわけです。それはもう一つの動き、別の動きを見いだす術ではないかなと思います。ただ、自分の持っている動きそのものはそんなに大きくは変わりません。小さな変化を見つけるための一つのやり方です。

参加者 5：環境条件で、例えば何かを変えてみるのかということはあるんですか。

岩下：環境を変えるというようなことでは、舞台のセンターに自分が行けないように彫刻を置いてやったりしたこともありましたね。いまでも良く覚えています。私のような即興のソロ・ダンサーというのはセンターを取る習性があるんですね。センターを取らないとやっていけないようなところがあるんですが、そこをあえてセンターを取れないようにしたことがおもしろかった。やっぱりセンターに行ってしまうんですよ。でも、そこには彫刻がドンと置いてあるわけです。

参加者 5：その場合はフォーメーションが変わるというか、円になる？

岩下：円になったりとか、行ったり来たり、放射状みたいになってみたりとか、動線が全然変わっていく。そのとき置いてあった彫刻がトルソだけだったんですよ。トルソだけで、かつ首から上がない。女性の裸体がモチーフになっているんですが、非常になまめかしいものでしたね。そのとき自分は男性なんだと感じました。すごくそういうふう感じた。女性の肉体のトルソがすごく生々しく感じましたね。触ってみるとすごく自分が男性だなど感じました。

参加者 5：踊りの中でも男性性がでてくる。

岩下：出てくるんですね。おもしろいですね。あまり普段は意識はしていないんですが、そのときフツと自分は男性だというのが出てきますね。

河本：ここまでいろいろ話してくださる方、話し好きの人もとときどき例外的にいますが、本来、そんなに話し好きではないので、ここまで話していただけるというのは本当に例外的な人たちでありたいと思って感謝をしています。今日は本当に長時間ありがとうございました。

岩下：私としてもおもしろかったですね。全くといっていいんですが、いわゆるダンスの経験がない方がほとんどだったと思うんですが、そんな方々がこんなに動かされたということは、これはなかなかないことです。こんな短い時間でここまで動いていただけたのが私はうれしいです。たいがいこういったワークでは初めての方はどうしていいか分からなくなって固まってしまうんですね。それでまったく動けなくなってしまう場合もありますし、はなはだしいときは「もう無理！」みたいに途中で帰られることもあるんですが、やっぱり何らかの関心があって興味があってここに来られたということが何よりだと思います。そういったものが皆さんの体を突き動かしたのではないかなと思います。